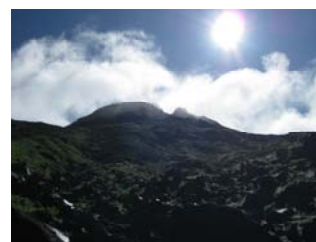


鳥海山

この山を初めて見たのは、5年前日本海を北上する飛行機の中からである。日本海からせり上がったこの巨大な緑の山塊は、山形県と秋田県に跨る標高2,236mの成層・円錐火山で、秀麗の一言に尽きる。群青の日本海と深い緑の円錐の見事な森を見下ろしていると、心底美しく、その中央部まで入って行きたいと思った。



鳥海山

ここ数年、中高年の間では「百名山」登山がブームとなっている。百名山は、登山家深田久弥が個人的に山の「品格」「歴史」「個性」を基準に百名を自ら選び、1964年に随筆「日本百名山」として刊行している。

そういう私も、数年前から百名山に遊ぶ喜びを覚え、毎年5山程度を目標に山行している。もちろん鳥海山は百名山の一つで東北地方の雄である。

今夏やっと機会を得て、鳥海山に登ることになった。山行前日は台風の影響で暴風が吹き荒れ、最悪のコンディションであった。それでも午前3時には星空が見え、5時頃までは快晴であった。しかし夜明けとともに雲が押し寄せ、その後は一日中降ったりやんだりの天候となった。朝4時半に鉾立登山口を出発し、ひたすら歩く。いつもそうだが未明一人で歩き始めると何か心許ない不安な気分がつきまとう。御浜小屋を過ぎ、夏でも雪渓が外輪山へとせり上がる千蛇谷を渡り、鳥海湖を見下ろしながら高山植物で咲き乱れる扇子森を歩く。全体として、玄武岩と安山岩の溶岩からできているらしく、玄武岩の柱状節理も観察された。頂上は巨大な岩塊の累積する突き出た岩の上であり、秀麗な山の頂としては、少し残念な気持ちがないではなかった。

今回の山行計画は4日間で4山に登ることに決めていた。月山、鳥海山、早池峰山、岩手山である。月山は高山植物の宝庫である。



ハヤチネウスユキソウ



コマクサ

ニッコウキスゲ、ヒナザクラ、トキソウ、サワラン、ワタスゲなどが咲き、弥陀ガ原湿原はとも美しい輝きを見せていた。



月山

早池峰山は人の名前に似て何か親しみを感じていた。カンラン岩の変成岩である蛇紋岩の山塊に、スイスのエーデルワイズより美しいと言われる同じ種のハヤチネウスユキソウが咲き乱れていた。3山はどれも雨で視界が悪く、眺望は望めなかったが、唯一天気予報を覆し快晴の日を迎えたのは岩手山登山であった。岩手山は麓の町のどこからもよく見え、この巨大な山の形状はどこかオーストラリアのエアーズロックに似ていると勝手に思っている。岩手県民の誇りの山である。溶岩流の走りがよく観察され、焼け走りと呼ばれる細かい火山砂礫地帯に、高山植物の女王といわれるコマクサの群生があり、北アルプスの砂礫の中で感じる雰囲気とは全く異なり、意外な気がした。

山には人格や品格があるのか、関取や軍艦には山の名を冠したものを多く聞く。何が

あっても山のように動じないものであれということなのだろうか。山頂は荒れ狂っても富士の如く堂々と生きろとは、小説家吉川英治氏の言葉である。

山行を前に、山の概要を調べ、登山計画を練り、事前準備をし、当日は状況に合わせて柔軟に対応する。こうした山行は、事にあたって目標・計画・準備等をしっかり学ぶことであり、青年の訓練に最適なものと思っている。



岩手山

昔久御山高校にも山岳部があったのだが、今はないのが残念である。

鳥海山登山の時、暴風雨の日に登山し、亡くなられた方を御浜小屋近くで見た。小屋まであと200m歩けば助かった命である。無念であったらと思う。下山途中の賽の河原には、ニッコウキスゲが雨にぬれて咲いており悲しみを一層深くさせた。無謀はいけないとつくづく思った。

今夏は多忙を極め、学校あげて読書推進している者として、あまり読書できなかったことが残念だ。しかし村上春樹氏の「1 Q 8 4」は深く考えさせられたし、百田尚樹氏の「永遠の0」には激しく心を揺すぶられた。どちらも今の若者達に是非とも読んで欲しい書物である。

まもなく新学期、真っ黒に日焼けした生徒達が夏の大きな成果を持って学校に帰ってくる。創立30周年記念の学校中庭のステージも完成間近だ。楽しみな2学期である。